

源氏物語評釈

空蟬

三

第三帖 空蟬 評釈

〔旧注〕并一。此卷は源氏君十六歳の夏の事なり。以レ歌為卷名一。へうつせみの身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな。并の義は、先横を以て本とす。うつほ物語・浜松物語のごとし。但、此物語にかぎりて豎の并あり。此物語には并に三の品有。一には豎、二には横、三には横豎をかねたり。豎とは此卷の類なり。此卷は帚木の末の事を書つづけたり。さて横とは、蓬生の卷の類なり。みをつくしの初の時分の事を書たり。是はみをつくしのはじめにかくべき事の、そこにかかれねば、別に一卷としたる也。横豎をかねたるは、末摘花の卷の類なり。はじめは若紫より前の事あり、末には若紫より後の事あり云々。

〔玉〕帚木卷の同年にて、源氏君十七歳なり。十六とするは誤なること、上にいへるのごとし。これよりつぎつぎ処女巻まで、諸抄一年のたがひ有とするべし。

〔新〕誰やらん、此文に豎横てふ事をいひ出したるに、其理りかける物のいひなしわろく、理り明らかならず。先豎とは本系の事にて、源氏もとより、葵上などの本系の類をいふ。此空蟬の卷などの類は、本系にはあらねど、帚木の卷よりつぎきて一ツの筋なれば、横といふべからず。よりて豎の并とはいへり云々。これも巻々の惣ての心しらしめん料なれば、さも有べし。されどかかる事にいと心をつけずとも、本末をよくよみどく時はおのづからしらるる也。今の人は、かく様の事にのみ目をくわして、文の意をよくよみどかぬなるべし。

〔釈〕案に、旧注に并の卷の事をいはれたること、一わたりは心得おくべし。されども、新釈・小櫛などにはいはれたること、しひてさだすべき事にごとくなれば、これより次の巻々には皆はぶきて、小櫛の年立をのみ用ゐたり。

〔評〕この卷は、帚木卷の末をゆくりかにきりて一卷としたるなれば、よろづかの卷の脈に続けてよむべし。源氏君、御方違に中河の宿へおはして、一夜空蟬君にあひ給へりしなごりを、猶せちにおぼしむすれでふたたびおはしたるに、空蟬のかくれて逢奉らざりしかば、又さらにたばかりてしのび入給へるに、空蟬と軒端萩と相對ひて碁を打てありしをかいまみ給へる所など、殊にめづらかにかきなされたり。かくて人をしづめてしのびより給へるに、空蟬の君のひそかにすべり出て、おもひかけぬ軒端萩にあひ給へるなど、いといとめづらしくめでたし。さて夜ふかく出給へるに、老ごだちのよりきてとがめたる所、其さまをまさめに見るがごとくにて、いとをかしくめでたし。さてすべて此卷は、空蟬の君の用意のいみじきをいふ事主なる故に、軒端萩をとり出て、あわづかにそろかなる人の清らかにうつくしきさまにいひて、それを客として主とある空蟬の用意のいみじきをつよくきかせたるたくみ、いみじくめでたし。さるは、女はひたぶるにかたちのめでたきのみにもよらず、ただふかく心しらひして、かたちをもふるまひをもなだらかにおだしくめやすくもつて、人にかかるめあなづられぬさまにもてなし、又世中のとある事かかる事をもわきまへ、物のあはれをもおもひしりながら、見しらぬさまにもてなし、よろづ大どかにふるまふべき事どもを、ふかく此空蟬の君の上にとどめてあらはし見せたるなり。されば、かのもぬけのくだりよりして、末々もいと心にくきさまにかかれたるを、心とどめてあぢはふへし。

○空蟬のもぬけのくだりに、軒端萩のいぎたなく用意なきさまをあらはしたるは、れいの反対の脈なるを、源氏君の本意の人のすべり出てかく

もあらず。さて并とは、横に並びたるをこそいはめ、豎の并といふことは理りきこえぬいひざまなり。これは一つらにつぎたることをしかいへるなれば、続の卷などはいひもしつべし。然れども、ふるくいひ馴きつるに随ひて、今はたこれを改めず、おして并の巻といひてあるべし。さるは、さしも本文の意にあづかる事にもあらざれば也。さて諸注にいはれたること、蓬生巻関屋巻などは横の并にて、みをつくしの巻にかくべき事を人によりて分ちかけるなれば、論なし。此卷又夕顔巻などは帚木巻のつぎにて、さらに並びたる事なければいかなれども、帚木より夕顔までは一つらにつぎたる文なれば、しばらくそれを分たん為におして并といひてありなんか。末摘花を「横豎をかねたり」とあるも、いひざまよろしからず。これは若紫の并にはあれど、反対の法にて筆をかへたるにて、年月の続きは却て夕顔よりうけたり。さて末には若紫の事をもひびかせていへれば、并の中に続をかねたりなどこそいはめ。されど、これもまた旧きに随ひつ。さばれ、とにかくに理りの貫かぬいひざまなれば、一説に、桐壺を一とし帚木を二とし、空蟬をはき木の并一とし夕顔を并二とし、さて若紫を三としたるなどは、すべて用ゐず。ならびの巻とはいへども、一二三の次第はつぎつぎ五十四帖にして、并の巻を例なる物として、其前の巻に属する類としたる物とは見えざれば、今は空蟬を三、夕顔を四としてついでたり。又玉かづらの巻の次、初音巻より次々榎柱巻までの九巻を、すべて玉葛の豎の并とせられたるなどは、殊にいはれなし。かしこは玉葛君の事を多く書たる所なれども、すべては源氏君の栄えのさかりを年をおひてかたるを主としたるなれば、さらに玉葛の并にはあらぬものをや。猶そこにもいふべし。とにもかくにも、かやうの事どもは大かたにしてさしおくべし。さてまた年立の事は、旧注は処女巻までは一年づつのたがひあること、玉小櫛いはれたる

れたるにせんかたなくして、俄におもひうつり給へるさまに転してかかれたるなど、ゆくりなく事を引たがへて興としたるたくみにして、いとめでたし。さて老ごだちのとがめたるは、又其余波をあやなして、事のあへなくをさまらんことを惜みたるにほひの筆なる物から、其中にかかるがろしき御忍びありきのあやふきよしをいましめたり。末に小君のわたりありくにつけて、空蟬と軒端萩との思ふ心をとりに書分たれたるなど、例のめでたし。さて空蟬の歌の末に詞なくて此巻をどちめられたるは、巻の初のゆくりなきにひびかせたるものと見えて、首尾あひかなへり。いたづらに見過すべからずなん。

ねられ給はぬままに

〔花〕帚木巻の終の詞につづけてかけり。いまだ中河のやどりにとまり給ひての事なり。

〔評〕巻の分ちぎまいとめづらし。帚木巻に小君と共に寝給ひし事をいひをはりて、この巻の初にかく書おこしたる、思ひの外のこちして、いとをかし。なほざりに見過すべからず。

〔新〕余りの御心やましさに、いとせめて小君にかくの給ふ也。次に「例のやうにものたまひまつはさず」とあるをもておもへば、女にもかたりぬべしとおぼすよりなるべし。

〔釈〕人に憎まれたる事はをさをさなきを、といふ意也。「ならはぬ」は、未馴ぬにて、俗になれ来らぬといふがごとし。

〔評〕いとほしかしき物思ひに、存命しがたきやうにも思ふ、との給ふ也。てさぐりの

〔釈〕帚木巻にいへるごとく、男色をほめかしたる書ざま、これにてしるべし。男色ならずして「手さぐり」などは、いふべくもあらず。手さぐりのちひさく、髪長の長からざる小君がけはひの、空蟬に似たるを、わが御思ひなしにや、あはれにおぼしめすよし也。

〔湖〕帚木巻に、「かくれたらん所にだに、なほめていけどの給へど」といへる所をうけて聞べし。かのかくれまてたづねより給はんも、人めわるからんと也。

〔釈〕めざましとおぼしなから、夜を明し給ふ意也。のたまひまつはさず

〔釈〕「まつはす」とは、ねんごろにむつましくし給ふこと也。さうさうしと思ふ

〔釈〕中河の家の段、ここに終れり。次は、其後に空蟬のおもふ心也。おほしこりにけると

〔玉〕補「ける」の下によの字をそへて心得べし。此類所々に多し。必しもてにをほの誤又写し誤にもあらず。

やがてつれなくて云々

〔評〕空蟬の心につれなきにこり給ふよと思ふにつけても、速に思ひ絶給はばさすがにうかるべし、さりどて又強て思ひかけ給ふ事どもの絶ざらんもうたてあるべし、中ほどのよき所にて止んと思ふものから、さすがに心にかかりて物思ひがちにながめらるると也。人の心のくまぐまげにかくもこそとおぼえて、いとあはれふかし。

ただならずながめがちなり

〔新〕さは思ひながらも、何となく直なるよりはしたはしき也云々。

たばかれ

〔新〕古へ「たばかる」といふは、只おもひはかるをいふ。後世偽りあざむく心をかめるやうにおもへるは、古書の意にかなはず。

かかるかたにても

〔釈〕「かかる方」とは、好色のすちをいふ。小君、源氏君のめでたきに感じ奉りける故に、わづらはしきことをせさせ給ふは面倒なれど、ねんごろにしたしうの給ふをうれしと思ふ、と也。これも男色をほめかしたる脈なり。

源氏君

ねられ給はぬままに、われはかく人にくまれてもならはぬを、こ

よひなんはじめてうしと世をおもひしりぬれば、はづかしうて、な

がらふまじくこそ思ひなりぬれ、などのたまへば、涙をさへこぼし

てふしたり。いとらうたしとおぼす。てさぐりのほそくちひさきほ

ど、かみのいとながからざりしけはひのさま、似かよひたるも、思

ひなしにやあはれなり。あながちにかかづらひたどりやらんも、人

わるかるべく、まめやかにめざましとおぼしあかしつつ、れいのや

うにもものたまひまつはさず。夜ふかくいで給へばこの子はいといと

ほしくさうざうしと思ふ。女もなみなみならず、かたはらいたしと

おもふに、御せうそこもたえてなし。おほしこりにけるとおもふに

も、やがてつれなくて、やみ給ひなましかば、うからまし。しひて

いとほしき御ふるまひの絶ざらんも、うたてあるべし。よきほどに

かくてどぢめてん、とおもふものから、ただならずながめがちな

り◎君は、心づきなしとはおぼししながら、かくてはえやむまじう御

心にかかり、人わろくおもほしわびて、こぎみに、いとつらうもう

れたくもおぼゆるに、しひて思ひかへせど、心にしもしたがはずく

るしきを、さりぬべきをりを見て、たいめすべくたばかれ、とのた

まひわたれば、わづらはしけれど、かかるかたにてもものたまひまつ

はずは、うれしうおぼえけり。をさなきこちに、いかならんをり

にか、とまちわたるに、きのかみくにくだりなどして、女どちの

夕やみの

〔河〕万葉四、ゆふやみは道たどとし月まちてかへれわがせこそそのまにも見ん

わが車にてゐて奉る

〔釈〕小君我車にのせ奉りて率てゆく意也。

ことに見いれつゝるそうせず

〔評〕「みいれ」は、小君の方を見入る也。「つゝるそう」は、追従なり。その字は下学集に見ゆと余滴にいへり。

ひんがしのつまどに云々

〔釈〕南向の家の、東の妻戸ある所に源氏君を立せ奉りて、小君はその南の角の間の格子をたたきて「あけよ」などいひて、わざとさわがしくのしりあけさせて入たる也。さて其跡をそのままにあげ置て源氏を入奉らんとせしを、女房見て「あらはなり」といへるなり。さるを、小君はなほあけおかせんとて、格子の下されたる故を問ふ也。此わたりのさま、絵がける人に声あるこちして、いとめでたし。

にしの御かたの

〔細〕伊与介のむすめ軒端、秋也。空蟬のまま子也。此家の西の方にあたりてすめるなるべし。

さて向ひゐたらんを見ばやと思ひて

〔評〕小君とごだちとの問答をいひさして、源氏君のかいま見を説出せる筆づかひ、さらにめでたし。このうちに小君は入て、ものけしきを見るなるべし。下に「小君いでくるこちすれば」とある所へ相照して見るべし。

やをらあゆみいでて

〔釈〕妻戸の口を歩み出で簾のはざまに入給ふ也。

この入つるかうしは

〔評〕小君とごだちの問答しながら入たる故に、事にまぎれてその跡をまださらぬとなり。これ源氏君のかいまみの道を開きて、下のありさまをあらはし出まうけ也としるべし。

にしざまに見とほし

〔細〕唯今源氏は、たつみの方よりすぢかひて西のかたへ見とほし給ふなり。このきはたてたる屏風も

〔釈〕「このきは」とは、格子のきは也。格子にそへてたてたる屏風も、端の方たたまれたる也。これも小君が入し跡なるべし。さて又其内にたてそへたる几帳も、暑ければ帷を上へ打かけて、その下よりよく見入らると也。下の小君が詞に「格子には几帳をへて侍」とあるに合せ考ふべし。

火ちかうともしたり

〔釈〕これより内のありさまを語る也。或抄に、「碁をうつ故燈ちかき也」といへり。

もやの中柱に

〔釈〕「もや」は母屋の意なるよし、拾遺にいはれたり。主人の常に居る処也。「中柱」は壁につかぬ所の柱なり。それに空蟬はよりそひてあるなるべし。「側める」は、横によりそへるかたちなり。

なににかあらんつへにきて

〔評〕夜の見わたしの近からぬに、柱によりてよく見えぬさまを顕さんことて「何にかあらん」といへる、めでたし。

かほなども云々

〔評〕これより空蟬の用意ふかきさまをいへり。此段、かたちよからぬど用意ふかき人と、かたちよけれど用意なき人とを、反対としたり。よくよく味はふべし。手つき云々

〔釈〕碁を打には手あらはなるべきをも、よきほどに引かくす也。用意浅からぬ体なり。

どやかなる夕やみの、みちたどたどしげなるまぎれに、わが車に

てゐて奉る。このこもをさなきを、

いかならんとおぼせど、さのみ

もえおぼしのどむまじかりければ、

さりげなきすがたにて、門など

ささぬさきに、

といそぎおはす。人みぬかたよりひきいれて、おろ

したてまつる。

わらはなれば、とのぬ人なども、

ことに見いれつゝ

そうせず心やすし。ひんがしのつまどにたて奉りて、

我はみなみの

すみのまよりかうしたたきののしりていりぬ。ごだちあらはなりと

いふなり。

なぞかうあつきに、このかうしはおろされたる、

ととへ

ば、ひるよりにしの御かたのわたらせ給ひて、

ごうたせ給ふといふ。

さてむかひゐたらんを見ばや、

と思ひて、

やをらあゆみいでて、す

まみゆるによりて、

にしざまに見とほし給へば、

このきはたてた

る屏風も、

はしのかたおしたたまれたるに、

まぎるべき几帳なども、

あつければにやうちかけて、

いとよくみいれらる。火ちかうともし

たり。

も屋のなかばしらにそばめる人や、

わがこころかくる、

とま

づめとどめ給へば、

こきあやのひとへがさねなめり、

なににかあら

んうへにきて、

かしらつきほそやかにちひさき人の、

ものげなきす

がたぞしたる。

かほなどは、

さしむかひたる人などにも、

わざと見

ゆまじうもてなしたり。

てつきやせやせとして、

いたうひきかくし

ためり。いまひとり

はひんがしむきにて、

のこる所なくみゆ。しろ

「つちきだつ物
〔釈〕「だつ」は、「めく」と云に等しき形容辭也。これも遠き故におしはかりていへるなり。

うべこそおやの

〔釈〕これよりさきに、伊与介が我むすめを世に又なく思ふうはさなどを聞給ひたるさまに書る也。

心ちぞ猶しづかなるけをそへばや

〔評〕これより上には容貌のめでたきよしをあげて、ここにそのさわがしきをおとしめたり。空蟬は先ツかたちのわるきをいひて、次に用意のふかきをあらはせり。抑揚反対その法おこそかなりといふべし。

かどなきにはあるまじ

〔釈〕源氏君の心になりて、草子地より評じたるなり。文勢あぢはひあり。ごうちはてて

〔釈〕ここより又源氏君の見給ふさま也。軒端萩なり。

おくの人は

〔細〕空蟬也。坐敷の奥なるべし。

そこはぢにこそあらめ

〔玉補〕「持」は、今俗にいふ「せき」の事也。唐の碁の書に見えたり。

〔雅集〕左伝正義「奕棋謂不能相害為持」。

すみの所々

〔釈〕碁盤のすみの地をかそふるさま也。「および」はただ指の事なること、上に見えたり。

いよのゆげたも

〔花〕孟六花集に古歌とて出せり。いよのゆのゆげたの数は左八ッ右は九ッ中は十六。すべて三十三有といへり。

〔河〕余体源抄伊予湯雜芸備馬染へいよのゆのゆげたはいくつ、いさしらずやかずへずや、かすへずよますや、そよやなよ君ぞしるらんや

〔細〕数多き事にいふ也。又今父の伊与へ下りたる留守也。似合たる詞也。

〔釈〕軒端萩の碁の地をかそふるさまのあわつかなるを、かの「左八右九」などいふ湯げたのかそへさまによそへて、「たどたどしかるまじ」と戯れたるなり。

すこししなおくれたり

〔釈〕軒端萩の人品空蟬より少しおとりたりといへる也。上の「かどなきにはあるまじ」といふ語と同じく、源氏君の心になりて草子地より評じたる也。

たどしへなく口おほひて

〔玉〕軒端萩のぼうそくなるもてなしとはいたく異にして、たどへがたきよし也。

ねびれて

〔玉〕「あざやかなる所なう」といひ、「にははしき所もみえず」といへるぞ、すなはち此詞の注のごとくなる。

きうすものひとへがさね、ふたあゐのこうちきだつもの、ないがシド

しろにきなして、くれなゐのこしひきゆへるきはまでも、むねあら胸 頸

はに、ばうそくなるもてなしなり。いとしろうをかしげにつぶつぶ露 ジダラク 身ガマヘ ウツクシゲ マルマル

とこえて、そそろかなる人の、かしらつきひたひつき、ものあざやハツキ

かに、まみくちつき、いとあいぎやうづき、はなやかなるかたちなリト メモトクチモト リツバ

り。かみはいとふさやかにて、ながくはあらねど、さがりばかたの下 端 肩

ほどいときよげに、すべてねぢけたるところなく、をかしげなる人アンバイ 清 惣 ユガミ ウツクシゲ

と見えたり。うべこそおやの世になくはおもふらめ、とをかしく見ナルホド 親

給ふ。ここちぞなほしづかなるけをそへばや、とふとみゆる。かどオ

なきにはあるまじ。ごうちはてて、けちさすわたり、心どげに見えて、碁 竟 ダメサスヘン ハヤサウ

きはきはとさうどけば、おくの人はいとしづかにのどめて、まち給イシウ+

へや。そこはぢにこそあらめ。このわたりのこうをこそ、などいへ持 劫

ど、いでこのたびはまけにけり。すみの所々いでいで、とおよびを軒端萩詞 イヤモ 負 關 下レ下レ 指

かがめて、とをはたみそよそなどかぞふるさま、いよのゆげたもた屈 算 湯 桁

どたどしかるまじうみゆ。すこししなおくれたり。たどしへなくくアンナイニアル ヒンオトリ イハウヤウモナク *空せミ貌

ちおほひて、さやかにも見せねど、めをしつとつけ給へれば、おの口 覆 サツハリトモ 目 ツツト 着

づからそばめにみゆ。めすこしはれたるここちして、はななどもあセントヨコムキ 目 少 腫 鼻

ざやかなる所なうねびれて、にははしきどころも見えず。いひたつツキリトシタ ハナバナシキ カゾヘタテ

ればわるきによれるかたちを、いといたうもてつけて、このまされレバ 寄 容貌 タシナミツツシンデ △方タチノ

る人よりは、心あらん、とめとどめつべきさましたり。にぎははし軒端萩貌 目 留 状

まめならぬ御心は

〔釈〕好色のかたに信実ならぬ御心には、軒はの萩をあわつけしとは見おとし給ひながら、えおぼしうて給ふまじ、と草子地より戯れて評じたる也。

〔評〕これやがて下の人がへを引出べきためのした隊なりとするへし。見給ふかぎりの人は

〔釈〕源氏君のこれまで見給ふほどの人は、うはべを引つくるひて打とけず、用意して打もむかはぬさまにして見え参らすれば、かう打とけたる人のさまはまだ見給はず、と也。「そばめたる」とは、用意して正目には向はぬさまに恥らひたるかたちしたるをいふ。

かいまみ

〔新本〕は垣間よりひそかに見るより出て、何処にてもひそかに見るをかいまみといふ。

〔釈〕この「かいまみ」は用言也。ありさまをかいまみなどは、といふ意なり。なに心もなう云々

〔釈〕空蟬も軒端萩も見る人有ともしらず、何心なくてさやかに見られたるは、その人のためにいたはしと思ししながら、といふ意也。○「見給へまほしきに」とあるは、写しひがめたる也。改むべし。

わた殿の戸ぐちに

〔細〕前より此戸口に居給ひしやうにして、小君に見え給ふなり。いとかたじけなしと思ひて

〔釈〕久しく待せ奉りぬと思ひて、小君が恐多しと思へる也。

例ならぬ人侍りて

〔釈〕常にはあらぬ人ありて、空蟬の傍へ近くもえよらずといふ意也。其世の礼儀思ふべし。

あなたにかへり侍りなば

〔釈〕軒端萩の、おのがすむ西の方へかへりなば、といふ意也。

さもなびかじつべき

〔釈〕小君が「たばかり侍なん」といふをきき給ひて、「さやうにもいひなびかすべき空蟬のけしきならん。小君はわらはなれど、ものの心ばへ、人のけしきは察すべくしづまりたれば」と思ひ給ふ意なり。此所いささか紛らはしきを、かく見ざれば心得がたし。よくよく思ふべし。

このみかうしはさしてんとて

〔釈〕上文に、小君が「たたきののしりて入ぬ」といひ、次に「此人つるかうしはまだささねば」といへる格子の事にて、今また小君が出て外にあるを、女房のささんどて「わか君は云々」といひておろして鳴す也。格子の首尾、殊にとどのひてめでたし。「ならず」は、格子をさすとして音さするをいへる也。

しづまりぬなり

〔釈〕寝静まりぬるなり。ここより源氏君の詞也。小櫛に地の詞とせられたるはわるきよし、同補遺にもいへり。

いもうと

〔釈〕妹人の義也。いにしへは、夫妻兄弟ともに男より女をば次第にかかはらず妹といへり。ここもその意にて、空蟬の事也。このほどまではさる詞の遣りしなるべし。

たわむ所なくまめだちたれば

〔釈〕貞実なるすぢをたてて、いささかも撓ますなびかぬ意也。

くあいぎやうづきをかしげなるを、いよいよほこりにうちとけて

〔愛〕敬

ウツクシゲ

ジマンラシウ

わらひなどそばるれば、にほひおほく見えて、さるかたにいとをか

〔笑〕

ソバヘレバ

ソノガニテ

ウツ

しき人のさまなり。あわつけしとはおぼしながら、まめならぬ御心

クシキ

ソソツツコイ

ウハウハシタ

は、これもえおぼしはなつまじかりけり。見給ふかぎりの人は、う

〔放〕

ホドノ

キ

ちとけたるよなく、ひきつくるひそばめたる、うはべをのみこそ見

ヲユルストキ

表方

バカリ

給へ、かくうちとけたる人のありさまかいまみなどは、まだし給は

〔未〕

ソソキテミ

未 為

ざりつることなれば、なにごころもなうさやかなるは、いとほしな

〔未〕

サツハリミエルノハ

キノドク

がら、ひさしう見給へまほしきに、こ君いでくるこちすれば、や

〔は〕

ソ

をら出給ぬ。わたどのの戸ぐちによりぬ給へり。いとかたじけなし

ツト

渡 殿

倚 居

オソレオホイ

と思ひて、れいならぬ人侍りて、えちかうもより侍らず。さてこよ

〔詞〕

ツネ

軒端萩也

近

奇

源詞

今

ひもやかへしてんとする。いとあさまじうからうこそあべけれ、と

〔夜〕

キヨウサメウツラウ

ソ

の給へば、などてか、あなたにかへり侍りなば、たばかり侍りなん

〔小君詞〕

トウシテ△サ△格△ラ△ア△チ△ラ△ハ

〔計〕

ときこゆ。さもなびかじつべきけしきにこそはあらめ。わらはなれ

〔源心〕

シタガヘサウナ△空△セ△ミ△ヤ△ウス

コドモ

ど、物の心ばへ、人のけしきみつづくしづまれるを、とおぼすなり

〔キドリ〕

ヤウス察

オチツイタルモノラ

けり。ごうちはてつるにやあらん、うちそよめくこちして、人々

〔暮〕

イそよめきて

ザワツク

あがるるけはひなどすなり。わか君はいづくにおはしますならん。

〔ワカレル〕

ヤウス

細小君を女房たちの尋る詞也

ワカレルヤウスモノオト

このみかうしはさしてん、とてならすなり。しづまりぬなり。いり

〔格〕

子

〔源心詞〕

静

入

てさらばたばかれ、とのたまふ。この子もいもうとの御心は、たわ

〔計〕

小君

アネ

む所なくまめだちたれば、いひあはせんかたなくて、人ずくななら

〔貞実〕

源氏詞

源氏詞

〔撓〕

んをりに、いれ奉らんと思ふなりけり。きのかみのいもうともこな

〔源心〕

妹

此

をらに、いれ奉らんと思ふなりけり。きのかみのいもうともこな

〔源心〕

妹

此

をらに、いれ奉らんと思ふなりけり。きのかみのいもうともこな

〔源心〕

妹

此

かうしには木丁そへて

〔**釈**〕かいまみすべき格子には几帳をたてそへてあれば見えがたし、と申す也。

さかし

〔**玉**〕さやうぞかしなり。「かうしには木丁そへて侍」と申せること也。

このたびはつまどを

〔**釈**〕かうしはすでにさしたれば、このたびは妻戸をたたきてあけさせて入る也。心をつけて見るべし。

みな人々しづまりねにけり

〔**評**〕ここにて人々の寝しづまれるを、たしかにことわりたる也。例の委しき書ざまなり。

このさうじ口に

〔**釈**〕小君、涼しき所にねんとするさまにもてなして、入たる所のはし近きさうじぐちにふして、源氏を入れ奉んとはかる也。

たたみひろげて

〔**余**〕古への畳は今のうすべり也云々。

〔**釈**〕案に、此説よろし。「風吹とほせ」といひたるは、はしちかくねたるゆゑを人に聞しめん為也。さて常にねぬ所なれば敷べき物なき故に、うすべりの畳をひろげて其上に臥たる也。諸注に屏風の事とせられたるは

わろし。

ごだち東のひさしに

〔**評**〕空蟬の方に人すくなきよしをかかんとて、まつかくいへる也。

戸はなちつる童も

〔**評**〕上に「妻戸をたたきている」とある時に、内より戸をあけたるわらは也。上に其よしをばいはずれどもあけたる人は必あるべきを思ひて、かくかきとぢめたる筆づかひ、例のいとくはしくめでたし。

〔**釈**〕「そなたに」とは、ごだちのねたる東庇也。されば此童は、女のわらはなるべし。

をこがましき事もこそ

〔**釈**〕或説に、「心をあはせたる事にもあらず、幼き人をするべにていかがと危く思しめせど也」といへり。

もやの木丁のかたびら

〔**釈**〕空蟬の寝たるもやの木丁の帷を引あげて、そこより入給ふ也。

やはらかなるしも云々

〔**釈**〕人皆寝しづまりては物おとのよく聞ゆるものなれば、源氏の和らかなる御衣のけはひもいとちじくる聞えたるさま也。

あやしく夢のやうなる事

〔**釈**〕「夢のやうなる事」は、さきに一度源氏君にあひ参らせたること也。この比忘れ給ふやうなるをうれしと思ひながら、さすがに忘れがたく心にはなれず思ひ出らるる比にて、といふ意也。

心とけたるいだにねられず

〔**河**〕余君こふる涙のかかる冬の夜はこころとけたるいだにねられず拾遺集・恋・よみ人しらず。結句「いやねらるる」とあり。

〔**釈**〕心をゆるべ、打とけてうまくねられぬ也。

ひるはながめ云々

〔**河**〕よるはさめひるはながめにくらされて春はこのめもいとなかりけり〔**余**〕謙徳公集に女の歌とて載て有。四の句「春のこのめ」とせり。

〔**釈**〕昼は物思ひに空をながめ、夜もまた物思ひにねざめがちなれば、この目もいとまなく歎かしきに、といふ意を此歌によりてかける也。此目に木芽をいひかけたるはさらにもいはず、今は夏の時なれば春ならぬとことわりたる、いとめでたし。

ひとへ打かけたる木丁の

〔**万**〕木丁のかたびら二重なるべきを、夏なれば「ひとへ」とかけり。

〔**釈**〕伴雄云、かさねのひとへを二重ぬぎて木丁にかけおきたる也といへり。うちみじろぎ

〔**釈**〕しづかに身を動かす形容をいへる詞にて、俗に「むぐめく」といふに近し。諸注みなかなひがたし。

たにあるか、われにかいまみせさせよ、との給へば、いかでかさはイビ方在 ノソキメ 小君詞 ドウシテサウハ

侍らん。かうしには几帳タテソヘそへて侍る、ときこゆ。さかし。されども、源氏心 サウジヤ ハ見り

とをかしくおぼせど、みつとはしらせじ。いとほしとおぼして、よ可 笑 ミタ △小君ニモ マイ キノドクナ 夜

ふくることの心もとなさをのたまふ。このたびはつまどをたたきて更 マチドホサ 妻 戸 敷

いる。みな人々しづまりねにけり。このさうじぐちにまるはねたら入 小君詞 障 子 口 ワシ ネテララ

ん。風吹とほせ、とてたたみひろげてふす。ごだちひんがしのひさ通 置 東 庇

しに、いとあまたねたるべし。とはなちつるわらはも、そなたにい大 セイ 殺 戸 アケ 童 女 其 方

りてふしぬれば、とばかりそらねして、火あかきかたに屏風をひろ風 チト ネタフリ 明

げて、かげほのかなるに、やをらいれ奉る。いかにぞ、をこがまし影 カスカ ソツト 源氏心 ドウテアロ バカラシ

きこともこそ、とおぼすにいとつつましけれど、みちびくままに、イ △アラマ キミワル ツツシマン △小君方 導

もやの几帳のかたびらひきあげて、いとやをらいり給ふとすれど、身 屋 帷 引 上 イカニモソコロト

みなしづまれる夜の御ぞのけはひ、やはらかなるしもいと皆 人 ネシツマレル 衣 サオト 和 著

けり。女はさこそわすれ給ふを、うれしきに思ひなせど、あやし△源ノ △コト 著 フシキニ

夢のやうなることの、心にはなるるをりなき比にて、心とけたるイ を 離 心

いだにねられずなん、ひるはながめよるはねざめがちなれば、春殺 殺 ＊ ＊

ならぬこのめも、いとなくなげかしきに、暮うちつる君、こよひはヒ マ ナ ク ノ キ バ ノ 紙

こなたに、といまめかしくうちかたらひてねにけり。わかき人は此 方 △トマラン メツラシク タウセイフウニ 談 若

何心なく、いとよくまどろみたるべし。かかるけはひの、いとかうネ イ リ サ オ ト 香

ばしく打にほふに、かほをもたげたるに、ひとへうちかけたる几帳蒸 顔 モチアゲ 懸

のすきまに、くらけれど、うちみじろぎよるけはひいと透 間 暗 ム ゲ メ キ ケ シ キ 著 キ ヨ

ひとへひとつをきて

〔新〕いとあつければ、肌にはひとへのみきて、小桂コツギキはもとより、衣もみな上におきてふしたれば、其ひとへのみにて、外をばすべしおきて出たる也。

すべり出にけり

〔釈〕ひそかにすべりぬけて逃出たる也。「すべる」とは、立ずして居ながらはひ出るをいふ也。

ゆかのしもに

〔釈〕空蟬のねたる下段の間の床の下に、女房二人ばかりふしたる也。其外は皆東の庇に入て寝たるなり。

あやしくやうかはりて

〔釈〕軒端ツツミ狄のいきたなきさまなど、空蟬とはさまかはりたる也。さて「さまなどぞ」とあるぞもじは、「やうかはりて」といふまでへ係る意とは聞ゆれど、さてはその結びなくていかがなり。「やうかはれるに」など有べくおぼゆ。もしくは字のおちたるならんか。考ふべし。

人たがへとたどりて見えんも

〔新〕人たがへと見えんもはちあるがうへに、空蟬にかよふならんど此人にあやしまれんは人のためいとほしとなるべし。

ほいの人を

〔釈〕本意の空蟬を尋ねんにも、かくまでのがるる心あれば、尋るかひもなくあはずして却てをこにこそ思はめ、と也。

かのをかしかりつる

〔釈〕暮を打てありし時、火かげに見給ひたるかたちならば、よしやいかがはせんとおぼして、軒端ツツミ狄に御心うつるさまなり。かれ、「わるき御心あさなめりかし」と地より評じたるなり。

さまざまおぼえて、ともかくも思ひわかれず。やをらおき出で、すウサメウ

ずしなるひとへひとつをきて、すべり出にけり。君は入給ひて、た細

だひとりふしたるを心やすくおぼす。ゆかのしもに二人ばかりぞふ一人

したる。きぬをおしやりてより給へるに、ありしけはひよりは、も衣

のものしくおぼゆれど、おもほしもよらずかし。いきたなきさまなエタルヤウニ

どぞ、あやしくやうかはりて、やうやう見あらはし給ひて、あさまどぞ、

しく心やましけれど、人たがへとたどりて見えんも、をこがましくメウ

あやしと思ふべし。ほいの人をたづねよらんも、かばかりのがるるフシギナコト

心あめれば、かひなくをこにこそおもはめとおぼす。かのをかしか心あめれば、

りつるほかげならば、いかがはせんにおぼしなるも、わるき御心あツタ

ささなめりかし。やうやうめさめて、いとおぼえすあさましきに、浅

あきれたるけしきにて、なにの心ふかくいとほしきよういもなし。用意

世中をまだ思ひしらぬほどよりは、ざればみたるかたにて、あゑか世中を

にも思ひまどはず。われともしらせじとおもほせど、いかにしてかウモ

かる事ぞ、と後におもひめぐらさんも、わがためにはことにもあらウナ

ねど、あのつらき人の、あながちによをつつむも、さすがにいとほレド

しければ、たびたびの御かたがへにことつけ給ひしさまを、いと

よいひなし給ふ。たどらん人は心えつべけれど、まだいとわかき

ここに、さこそさしすぎたるやうなれど、えしも思ひわかず。に

くしとはなけれど、御心とまるべきゆゑもなきここにちして、なほか

世をつつむも

〔余〕「つつむ」は、「つつしむ」といはんがごとし。

〔釈〕言のものは「つつしむ」と同じけれど、「つつむ」は「かくす」と云かたなり。

たどらん人は

〔釈〕「たどらん」とは、おしあてに推察してさぐり知んといふ意也。「心得つべけれど」とは、空蟬への御心ざしと心得つべけれど也。さこそさし過たるやうなれど

あやにくにまぎれがたう

〔釈〕かくしふねき人はなしとおぼしめさば、さても思ひ絶給ふべきを、あやにくに思ひ出られ給ふ、と也。帚木巻の初に、「あやにくに心づくしなる事を云々」とある脈にて、源氏君の本上なり。心をつくべし。

人しりたることよりも

〔釈〕「なべて世に顕はれ、人に知られたる中よりも、かやうにひそかに相見るは、物のあはれもふかくそふ事と昔の人もいへり。されば、必相思ひ給へよ」との給ふなり。「昔の人もいひける」とあるには、引歌などあるべき所なり。考ふべし。

つつむことなきにしもあらねば

〔釈〕世に憚らずかよひ来べき身にしもあらねば、我身ながらわが心にもまかせがたし、と也。

さるべき人々も

〔釈〕「人々」は、伊与介・紀伊守などをさしての給ふなるべし。

なほなほしく

〔玉〕花鳥に「よのつねのなほざりにかたらふ心なるべし」とあるぞよろしき。すべて此詞は俗言に「なんでもない」といふ意也。

〔評〕かくのたまふは、軒端萩の御心につかぬ故に、今よりとだえおき給はんしたくみをしてのたまふやうに書なせしさま、言の外にほひたりえきこえさすまじき

〔湖〕消息などもえ申かはすまじきと也。

かのぬぎすべしたりと見ゆるつす衣

〔玉〕一本に「かく」有ぞよろしき。ぬぎすべしたる事は、源氏君はたしかには知給ふまじければ、「と見ゆる」といふ詞あるべければ也云々。

〔釈〕「ぬぎすべし」は、ぬぎすべらかして捨置たる也。上に「ひとへひとつをきて」とあるにてらして見るべし。

ふとおどろきぬ

〔釈〕驚きてさめたる也。

戸をやらおしあくるに

〔釈〕さきに童にあけさせて小君が入るつま戸なるべし。「老たるごたち」は、東の庇にねたる女房のうちなるべし。

さかしがりてとぎまへく

〔新〕賢ぶりして也。

〔釈〕老女のかしこたてして外の方へあゆみくる也。余滴などに小君を云としたるはひがこと也。

いとにくくて

〔釈〕小君が心に、老女のさかしがるをにくくおぼえて也。※本文に「いと」はない。

あらず

〔玉〕俗言に「いや何事でもない」といふ意なり。

暁ちかき月

〔万〕前に「夕やみ」とかける詞の次第、面白し。

又おはするはたそと云々

〔細〕此女のいふ也。「たそ」とどひて、また「民部のおもと也」と自問自答する也。花鳥には「少輔のおもと」とあり。本のかはり也。

〔花〕「おもと」は、お局などいふが如し。

のうれたき人のころを、いみじくおぼす。いづこにはひまぎれて、

ツレナキ 空セミ

ヒトクラメシウ

ドコ

コツソリカクレ

かたくなしと思ひみたらん。かくしふねき人はありがたき物を、と

グチナコト

居ルテアラウ

シフトイ

メツタニナイ

おもほすにしも、あやにくにまぎれがたう思ひ出られ給ふ。この人

△空セミノコガヒ

△空セミノコガヒ

ノキバノ萩

ノキバノ萩

のなに心なく、わかやかなるけはひもあはれなれば、さすがになさ

若

アンバイ

サウハ云モノノ

けなさけしく契りおかせ給ふ。人しりたる事よりも、かやうなるは

ヤククシ

△ノ

△ノ

△ノ

あはれもそふこととなん、むかしの人もいひける。あひ思ひ給へよ。

添

△ノ

△ノ

△ノ

つつむことなきにしもあらねば、身ながら心にもえまかすまじくな

△ワカ

△ワカ

△ワカ

△ワカ

んありける。又さるべき人々もゆるされじかし、とかねてむねいた

然

免

イマカラ

心 痛

くなん。わすれでまち給へよ、などなほなほしくかたらひ給ふ。人

△アル

△アル

△アル

△アル

の思ひ侍らんことのはづかしきになん、え聞えさすまじき、とうら

萩詞

△ワカ

△ワカ

△ワカ

もなくいふ。なべて人にしらせばこそあらめ。このちひさきうへ人

源詞

イの

△サウモ

△サウモ

などにつたへてきこえん。けしきなくもてなし給へ、などいひおき

伝

イモ

ナノノハンモナク

ナノノハンモナク

て、かのぬぎすべしたり、と見ゆるうすぎぬをとりて出給ひぬ。こ

△空セミノ

△空セミノ

△空セミノ

△空セミノ

ふとおどろきぬ。戸をやらおしあくるに、おいたるごたちのこゑ

源詞

イの

△サウモ

△サウモ

ろぞどいらふ。夜中にはなぞありかせ給ふ、ときかしがりて、と

答

此

何

歩 行

ざまへく。にくくて、あらず。ここもとへ出るぞ、とて君をおし出

△空セミノ

△空セミノ

△空セミノ

△空セミノ

奉るに、あかつきちかき月、くまなくさしいでて、ふと人のかげみ

暁

△空セミノ

△空セミノ

△空セミノ

えければ、またおはするはたそ、ととふ。みんなのおもとなめり。

△二人

△二人

△二人

△二人

湖源のかげ也

湖源のかげ也

湖源のかげ也

湖源のかげ也

湖源のかげ也

御許

御許

御許

御許

御許

御許

御許

御許

御許

御許

御許

御許

御許

御許

御許

御許

御許

御許

御許

御許

御許

御許

御許

御許

御許

いまだ今立ならび給ひなん

小君が青長の、ただ今のほどに民部のおもとばかりになりて立並び給ふべしと云也。老女のくちつきをいとよくうつしかかれたりといふべし。この戸より

〔釈〕小君があけたる戸口より老ごたちも出てくる也。わびしけれと

〔釈〕源氏君也。「おしかへさで」は、おしかへして返答もえし給はぬ也。湖月に「老女のくるをどめがたき心也」とあるは、少ししたがへり。渡殿の口

〔釈〕上に「わた殿の戸口に」と有し所也。「かいそひて」は、引そひて也。うへにやさふらひ給ひつる

〔玉〕或抄に「うへ」とは主人のおはします所をさしていふ也」といへる、よろし云々。次の文に「しもに侍つる」といへる「下」と対へて心得べし。「しも」は下屋也。

いらへもきかであなはらはら

〔釈〕返答をも聞ずして行過たる也。「今聞えん」とは、後に委く語らんといふがことき意也。

〔新〕「はらはら」は、「腹いたし」といふべきを「いたし」とまではいひあへぬなり。

いらいよおほしこりぬべし

〔釈〕「いらいよ」といへるは、上に「この子をさなきを、いかならんとおぼせど」といひ、「いかにぞ、をこがましき事もこそ、とおほすに」などあるに對へて、「いらいよ」とはいへるなり。湖月師説に「空蟬のつれなきにこり給ふうへに云々」といへるはたがへり。

〔評〕この老ごたちに出あひ給へる一段は、例の余情に書そへたるものにて、人たがへの事の儀にあへなくをさまらん事を惜みたる筆づかひなるべし。いとらとめでたし。

御くるまのしりにて

〔釈〕小君御車のしりに乗て御供するなり。

つまはじきをして

〔釈〕ふかく恨むる時のさま也。「つまはじき」は、爪さきをたわめて弾くことなり。

身もうへ

〔新〕こは身を恥る語にて、歌に「うき身」といふに同じ。

ありつるこうちきを

〔評〕上に「うす衣をとりて」とあるを、ここに小桂といひて、うすぎぬやがてこうちきなるよしをおもはせ、さて下に「かのうす衣は、こうちきの云々」とかきあらはされたり。心をつくべし。

けしうはあらぬおもとのたけだちかなといふ。たけたかき人の、つ
ケシカラム長立
セイノタカイ

ねにわらはるるをいふなりけり。おい人これをつらねてありきける
常 笑 老 △小君方

と思ひて、[＊]今[＊]ただいま、[＊]たちならび給ひなん、といふいふ、われも
タツタイマ 立 並 イヒナガラ

[＊]この戸よりいでてく。[＊]わびしけれど、えはたおしかへさで、わた殿
出 米 △源氏 メイワケナレ下 回 老ゴタチ也

のくちにかいそひて、かくれたち給へれば、このおもとさしよりて、
口 副 立 老

おもとはこよひはうへにやさふらひ給ひつる。[＊]をととひよりはらを
詞 今夜 上 侍 △我ハ一昨日 腹

やみて、いとわりなければ、しもに侍りつるを、人ずくななりとて
病 下 少

めししかば、よべまうのぼりしかど、なほえたふまじくなん、とう
召 昨夜 参 上 マタヤハリ 堪 △アル

れふ。[＊]いらへもきかで、あなはらはら、いまきこえむ、とてすぎぬ
愛 返答 アアハライタハライタ オツケ 通

るに、からうじていで給ふ。[＊]なほかかるありきは、かるがるしくあ
草子地 ヤハリ 微行 軽々

やふかりけり、といよいよおほしこりぬべし『こ君御車のしりにて、
危 戀 後乗

二条院におはしましぬ。ありさまのたまひて、をさなかりけり、と
△小君三今夜ノ 稚

あはめ給ひて、かの人の心を、つまはじきをしつつうらみ給ふ。[＊]
サミシ 空セミ 爪 弾 ナガラ 小君

とほしうてもものもえ聞えず。いとふかうにくみ給ふべかめれば、身
ノ下 クテ △空ノ △ワカ

もうく思ひはてぬ。なかよそにても、なつかしきいらへばかりは
ツラク 竟 ヨソナガラ ヘンジ

し給ふまじき。『いよのすけにおとりける身こそ、など心づきなしと
伊 与 介 劣 △ウラメシ キニクハヌ

おもひての給ふ。ありつるこうちきを、さすがに御そのしたにひき
小 桂 サウハフモノノ 衣 下

いれて、おほとのごもれり。こ君をおまへにふせて、よろづにうら
御 前 令 臥

みかつはかたらひ給ふ。あこはらうたけれど、つらきゆかりにこそ、
カタチマニハ 吾子 カハユ ツレナキ△入ノ縁

えおもひはつまじけれ、とまめやかにのたまふを、いとわびしと思
トゲ シンジツニ ツライ

御硯いそぎめして

〔**釈**〕或抄に「早朝未明に也」といへる、よろし。さらでは「いそぎ」といふ事、用なく聞ゆ。

たたうがみ

〔**釈**〕紙を畳みてふところに入おきて、用ある時つかふを「たたうがみ」といふ。今世のはな紙のごとし。

うつせみの身をかへてける

〔**釈**〕「うつせみ」は、ここにてはただ蟬の事なり。「身をかへてける」とは、蟬の蛻けたるを云。さるからに「空」といふことをかろくそへていへるまで也。一首の意は、我をいとひてにげ隠れたるはうらめしけれど、猶用意ある人品のなつかしき、といひて、「人がら」に蟬の蛻けたる「殻」をいひよせて、かの小桂を人の殻とさしたるたくみなり。「このもとに」といへるは、蟬の樹下にて蛻くるになぞらへて、かのきぬを脱すべしたる所をいへる也。諸注用なき事のみ多くして、歌の意をどかれたるもなきは、いかにぞや。

かたがたおもほしかへして

〔**釈**〕空蟬の思ふ心、かつは小君が心などをさまざまに懼り給ふを、「かたがた」といひへるなるべし。

人が

〔**湖**〕人香也。うつりがの事也。

心をさなきを

〔**釈**〕おとなしき心なくあさはかに嫌したる事を「心をさなく」といへる也。ひだりみぎに

〔**花**〕源氏はこの事故に恨み給ふ、あね君ははづかしめ給ふ、小君が左右にくるしく思ふ也。

御手ならひ

〔**釈**〕手をならすためにむだがきするをいふ。今世にいふとはすこし異也。さすがにとりて見給ふ

〔**釈**〕小君をはづかしめたるものから、さすがにとりて見る也。「給ふ」とかけるは、地の語ながら小君が心になりていへるにや。下に「わたり給ひにけり」とあるも同じ。

いせをのあまの

〔**河**〕後撰「すずか川伊勢をのあまのすて衣しほなれけりと人や見るらん。心は「猶人がらのなつかしきかな」とあるをみて、「きならしたる物を」などはづかしく思ふ也云々。

〔**釈**〕「しほなれ」は、垢じみよごれたるをいへる也。ただならず

〔**湖**〕源氏をおもふ故也。

〔**釈**〕この説のごとし。ただにはあらで、さまざまに思ひみだるる也。わたり給ひにけり

〔**釈**〕「わたり」といふ語、こなたへ来るがごとくにも聞ゆれど、「物はづかしき心ちして」とあれば、旧注のごとく、かへりたるなるべし。小君のわたりありくに

〔**釈**〕源氏の御もとより空蟬の方へ来てありくなり。

〔**新**〕此小君して聞え給ふべし、と契りおき給ひしに、さもなきをおもふなり。

御せうそこもなし

〔**釈**〕男女あひたる又のあした、消息する事は、そのかみのならはしなり。

あさましき云々

〔**釈**〕御せうそこもなきを、我を疎みてならんとて、あさましとも心得ずして、さし過たる心に物さびしく思ふ、と也。ありしならの云々

〔**河**〕とりかへす物にもがなや世中をありしならのわが身とおもはん

〔**釈**〕此歌、帚木にもありて既にいへり。ここもその意にて、「もとのままの身ならば源氏にしたがひ奉るべき事もあらん」と、とりかへされぬ昔の思ひ出られて、しのびがたきよし也。

ひたり。しばし打やすみ給へど、ねられ給はず。御すずりいそぎめ源 硯 召

して、さしはへたる御ふみにはあらで、たたうがみに、てならひのキイただ 置 紙 手 習

やうにかきすさび給ふ。ムダガキシ

うつせみの身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかヤハリ

な。とかき給へるを、ふどころにひきいれてもたり。かの人もいか小君 懐 中 入 持 有 ノキハノ萩

におもふらん、といとほしけれど、かたがたおもほしかへして、御アチコチト

ことづてもなし。かのうすぎぬは、こうちきのいとなつかしき人が小 桂 香

にしめるを、身ぢかくならしつつ見ぬ給へり。こ君かしこにいきた染 有 馴 小 桂 彼 廻 往

れば、あね君まちつけて、いみじうの給ふ。あさましかりしに、と空 詞 小 桂 トヤ

かくまぎらはしても、人のおもはんことさり所なきに、いとなんわカクヤ マギラカシ ノガレ

りなき。いとかう心をさなきを、かつはいかにおもほすらん、とてイ 心をさなき心ばへを ジヤクハイナルヲ △源ノカタマニハ

はづかしめ給ふ。ひだりみぎにくるしくおもへど、かの御てならひツサウナ アチラコチラ セツナク

とりいでたり。さすがにとりて見給ふ。かのもぬけをいかに、い△歌ヲ *空セミ サウハモノノ ヌケガラ ドウシヤウ

せをのあまのしほなれてや、などおもふもただならず、いとよろづ△アリシ ヒトトホリナラズ 万

にみだれたり。にしの君も、物はづかしきこちして、わたり給ひ△思ヒ 西 ノキハノ萩 △トコヤラ △ワカ方ノカヘリ

にけり。またしる人もなき事なれば、人しれず打ながめてゐたり。又 知 タダヒトリ モノオモヒシテ ツララナガメテ

こ君のわたりありくにつけても、むねのみふたがれど、御せうそこフ サ フ オトツレ

もなし。あさましと思ひうるかたもなく、ざれたる心に、ものキヨウサメイ 得 シヤレ モノ

あはれなるべし。つれなき人も、さこそしづむれど、いとあさはかサビシイ 空セミ サウハ △オモヒ 浅

にもあらぬ御けしきを、ありしならのわが身ならば、ととりかへ△源ノ △見テ モトノママノ モド

空蟬のはにおく露の

①この歌全編伊勢集にありと河海其外の抄どもにはれたるはひがこ
 となるよし、拾遺・新釈・小櫛共にいはれたるがごとし。全くいせ集に
 も何にもなき歌なり。さて初句は、「うつせみの身をかへてける」とあ
 るをうけていへるのみにて、これもただ蟬の事也。三句のものじは、例
 のごとくといふ意をふくめて聞くのにて、こゝまでは序なり。「木がく
 れて」は、ただかくれてといふ意なるを、蟬の縁に木隠コガレといへるのみなり。
 「しのびしのびにぬるる」は、わが身のすぐせのくちをしき事を思ひて、
 人しれぬ涙にひそかに袖をぬらすよしなり。此歌も諸注解得チられたるは
 なし。

②小君のわたりありくにつけて、空蟬と軒端ツツ狄ツツの思ふ心をかたみに
 書あらはされたるさま、心の中に入て見たらんがごとくにて、いといと
 めでたし。上に暮を打たる所にて、かたちのしづまりたるとさわがしき
 とをあらはしおきて、ここに至りて其心のけぢめをかき出られたるに、
 つゆばかりも勢ひのはづれたることなきは、いともいともめづらしき筆
 つきなりけり。さてここに歌をもて此巻をとぢめたるは、はじめに「ね
 られ給はぬままに」と、ゆくりなくふと書出たる首尾にて、わざとかく
 歌の末に詞なくて終られけんとおぼえて、いひしらずとどのひたり。見
 ん人よくよく味はひ考ふべし。

す物ならねど、しのびがたければ、この御たたうがみのかたつかた
 ス コラヘ 置 紙 片 方
 に、

*◆
 空蟬のはにおく露のこかくれてしのびしのびにぬるる袖かな。
 羽 △コトケ 隠